

研究ノート

永遠と時間

—“ティマイオス” (28B7) 解釈史との関連における—

野 町 啓

(1)

アウグスティヌスは、《神の国》第Ⅷ巻第11章において、プラトンの神観念とクリスト教の真理とが〈*quaedam similitudo*〉を有することを次のような理由に求め、またそれを論拠として一種のギリシア哲学聖書依拠説とでもいべき発想を展開している。⁽¹⁾すなわちプラトンは、たとえ通訳を介した間接的なものであったにせよ、〈*sacrae litterae*〉について決して関知していなかったわけではなく、むしろそこから得た知識に触発されてその神観を展開したのだというのである。その例証として彼は《ティマイオス》の書名をあげ、そこにみられる宇宙を構成する四元素として火・土・水・空気を考える発想は(31B)、《創世記》(1:2)においてすでに説かれているものであり、また同書にみられる哲学者とは〈*amor Dei*〉であるという規定も(90B)、プラトンがモーセの教説を知っていたことを示すものだと指摘している。そしてとりわけ、存在と生成とを峻別し、〈*incommutabilis*〉なるものを真に存在するものだとするプラトンの主張の源泉は、《出エジプト記》(3:14)においては考えられないと主張されている。

彼は《神の国》において、上掲箇所以外においても、しばしば創造と時間との問題に関連して、《ティマイオス》という書名は一々言及されてはいなくとも明らかにそれをさし、それと《創世記》とのここであげられているのとはまた別の、しかし最も問題となる類似点を念頭においた発言を行なっている。それは、宇宙生成、が〈*a deo factus*〉であることは認めながらも、そのいわば〈*ab aeterno*〉からするひいてはその永遠性を主張する、プラトンの徒の《創世記》(1:1)に対する異論とでもいべきものに対する反駁がなされている第Ⅸ巻第31章、第Ⅹ巻第4章、第Ⅺ巻第13章等である。彼は、これらの箇所において、〈*non eum [sc. mundum]*

semper esse, sed esse coepisse) とプラトンが明白に是認しているにもかかわらず、それと正反対の説をプラトンに帰している者のいることを指摘し、それに批判を加えている。彼によればこれらの人達は、宇宙が〈temporalis initium〉を有することを否定し、ただ〈creationis initium〉(XI,4)、もしくは〈substitutionis initium〉(X,31)のみを宇宙が有することを主張していることになる。この場合彼は、明らかに《ティマイオス》(28B7)の〈γέγονεν ἀπ' ἀρχῆς τινος ἀρξάμενος〉を念頭においているとよい。そしてまた彼のこの発言は、そこにみられる〈γέγονεν〉ならびに〈ἀρχή〉(=initium)の理解をめぐる、それを時間的にみる観点と、それを否定し別の意味にとろうとする観点との対立する二つの解釈がプラトンの徒の内部に存在していることを示唆している。さらにこの点は、後に検討を加えるプロクロス、ポエティウスの次のような報告からも例証される。すなわちプロクロスは、プラトンの同書の当該箇所に対する註解の中で、〈ἀρχή χρονική〉を宇宙に認めることにより〈ἀϊδιότης〉を宇宙からとり去ってしまった人々(τινες)の存在を指摘し、これらの人達を程度の低いアリストテレス主義者の主張にまどわされているとして批判している⁽²⁾。またポエティウスは、《哲学のなぐさめ》第V巻において、宇宙が無始・無終だというプラトンの教説を曲解し、⁽³⁾そこからだちに宇宙がその〈conditor〉と〈coaeternus〉だと考える人々(quidam)のいることを指摘し、それに対し批判を加えている。プロクロス、ポエティウスの両者は、一見宇宙の継続期間については正反対の見解をプラトンに帰属させているかのような外観を呈しているが、少なくとも〈ἀρχή〉の理解については共通の観点に彼ら自体は立脚しており、《神の国》において批判の対象とされるプラトンの徒の部類に属することは明らかであろう。

彼の場合、一見《ティマイオス》の同箇所を時間的に解することにより、それと《創世記》(1:1)との調定をはかろうとし、またそこに別の解釈をとるプラトンの徒を批判する意図があるようにも思われる。しかし《ティマイオス》のこの箇所に関して、彼は先の《神の国》第VIII巻11章にみられたような聖書依拠説を主張してはいない。これは、《ティマイオス》におけるプラトンの真意を宇宙の時間的始源を説くことにあったと解し、またそうすることによりプラトンの宇宙の起源に関する所説が聖書に依拠するものだとして主張している後のフィロポノスの場

合とは、解釈上軌を一にしているようにみえながらも、異なっている。⁽⁴⁾《創世記》と《ティマイオス》両者間にみられる発想なり内容上の類似から、後者の前者への依存、およびそこから基督教のギリシア哲学に対する優越性を説こうとするならば、後者の〈28B7〉ほど格好の論拠を提供するものはないといえる。⁽⁵⁾しかし彼があえてそれを試みていないのはなぜであろうか。それは一つには、《ティマイオス》の同箇所にはプラトニズムの内部においてすら解釈上の対立があり、その解釈の如何によっては宇宙の永遠性、ひいては創造者と被造物とが〈coaeternus〉視されることにもなるという、基督教の真理にとって不当な主張がそこから帰結され、まさに〈temporalis initium〉を否定するプラトンの徒を批判する所以が生じてくる契機を同箇所が内包していることが、彼の念頭にあったこと⁽⁶⁾にもよるであろう。さらにまた、宇宙の生成を単に時間的に理解するだけでは、以下検討をこころみるように、《創世記》(1:2)と《ティマイオス》とが調定されえないことが、彼の問題意識にあったからだとも考えられるのである。

ではなぜ、テキストの同一箇所にはいてこのように対立する解釈が生じてくるのであろうか。プラトンは、《ティマイオス》の当該箇所についてみる限り、たしかに宇宙は生成したといっているが、しかしその場合それが時間的な〈ἀρχή〉を持つとは明言しておらず、〈なんらかの ἀρχή から〉という漠然とした表現しかそこではとられていない。そこに、同箇所の解釈をめぐる、さまざまな相対立する観点が生じてくる一因を求めることも可能であろう。またさらに、ここでいわれている〈ἀρχή〉を時間的に解さないということは、一体どのような論拠に基づいているのであろうか。《神の国》にみられる〈creationis initium〉とか〈substitutionis initium〉とは、具体的にどのような〈ἀρχή〉解釈をさし、意味しているのか。この問題は、先にふれたプロクロスやボエティウスの発言が示唆しているように、宇宙の永遠性の問題と深いかわりを持つ。しかもこの宇宙の永遠性の問題は、基督教とギリシア哲学との交流の過程において両者間に介在する本質的相違を露呈さす根本的要因をなすものだとい⁽⁷⁾てよい。この問題に対しどのような態度がとられているかは、ある哲学者の位置づけに際し異教側か基督教かを判別する *critère* だとい⁽⁸⁾われる。周知のようにこの問題は、中世盛期13世紀において、〈Utrum Deus cognoscat particularia〉、〈Utrum intellectus sit unus omni-

um)とならんで重要な論点をなすことになる。⁽⁹⁾《ティマイオス》の当該箇所をめぐって展開されてくる解釈上の論争は、いわばこの前史をなすものであり、またその根底にあるものといえるのである。

(2)

宇宙の生成ならびにその継続期間をどう理解するかという問題は、古代哲学の文脈においては単に《ティマイオス》解釈の問題との関連からばかりではなく、《神の国》第Ⅶ卷12章や第Ⅷ卷41章にみられるアウグスティヌスの学説誌的報告からうかがえるように、⁽¹⁰⁾さらに宇宙の数の問題と密接なかかわりを持っていた。換言すれば宇宙の生成、ひいてはその継続期間のとり方如何により、この宇宙を唯一・独自のものであり統一性を有する自己完結したものとみるか、あるいは宇宙の絶えざる生成・消滅の反復により無数の宇宙の存在を信ずるか、諸家の見解はわかれてくるのである。また宇宙を独一だと主張する人々も、その生成、継続期間については意見が一致しているわけではなく、それを〈ortus esse〉とみなす人もいれば、反対に〈initium non habere〉だとする人もおり、一方でそれが〈interitus〉だと主張する人がいるかと思えば、他方ではそれを〈semper futurus〉とみる人もいるのであって、そこでは見解の相違がみられるのである（*De civ. Dei*, VIII, 41）。この種の報告は他にもいくつか伝存されているが、しかもそれらはテルトリアヌス、アムブロシウス、ラクタンティウス、ポエティウスといった⁽¹¹⁾クリスト教に属する、乃至はその色彩の濃厚な作家達に比較的多くみられ、それは彼らのこの問題に対する深い関心を反映するものといえるのである。

たとえばアムブロシウスは、この点に関する諸家の見解を、《*Hexameron*》（I, 1）において(1)〈*ipsumque mundum semper fuisse et fore*〉、(2)〈*non semper fuisse et semper fore*〉、(3)〈*non fuisse semper nec semper fore*〉に三分し、⁽¹²⁾をアリストテレス、(2)をプラトン、(3)を大方の人々の見解にそれぞれ配している。またポエティウスにおいては、〈*nec coeperit umquam esse nec desinat*〉とする⁽¹³⁾のがアリストテレスであり、同様にプラトンも〈*mundum hunc nec habuisse*⁽¹⁴⁾
initium temporis nec habiturum esse defectum〉と主張したとされている。⁽¹⁴⁾このポエティウスの報告は、先のアムブロシウスのそれと比較した場合、ことにプラトンに関して著しい対照をみせている。すなわち前者にしたがえば、宇宙は無

始ではなく、生成の発端がそこでは示唆されており、したがって宇宙は永遠このかた存続してきたとはプラトンは考えていないことになる。いわば〈a parte post〉という条件の下に、宇宙の未来永劫にわたる存続の主張がプラトンに帰せられているのであって、またそこにプラトンとアリストテレスとのこの点をめぐる見解の根本的相違が求められているとみることができる。これに反対し後者の場合、プラトンとアリストテレスとは必ずしも対立視されてはおらず、プラトンは明白に〈initium temporis〉を否定している。ことになり、両者共、一見、等しく宇宙の永遠性を説いているかのような報告がなされている。プラトンの所説の報告にみられるこの矛盾は、先にふれた《ティマイオス》(28B7)に解釈上対立する二つの系譜が存在することを例証するものといえる。事実アムプロシウスも、同じ《Hexameron》(I, 1)において、先の報告とは矛盾する〈ipsum quoque mundum incorruptum nec creatum aut factum〉という教説を、プラトンならびに彼の弟子達に帰しているのである。しかしこれらの学説誌的諸報告には、プラトンについては一致がみられないにもかかわらず、一つの共通した傾向がうかがえる。すなわち、そこにおいては、宇宙を生成したとすること、とりわけそれが〈temporis initium〉を持つとすること、宇宙の永遠性とが両立しがたいものと考えられており、したがってこれら二つの発想を組合すことを回避しようとする意図がうかがわれるのである。そしてこのような解釈上の伝統が定着してくる根底には、アリストテレスによる批判的意図からする《ティマイオス》解釈があり、またそこにプラトンの同書について対立する解釈が成立してくる所以も求められるように考えられる。そして、先にふれたアリストテレス主義者にまどわされた一部のプラトンの徒に対するプロクソスの批判が、このことを単的に例証しているといえてよい。

(3)

アリストテレスは、《天体論》第I巻10～12章、第III巻2章、《自然学》等において、さまざまな論拠から《ティマイオス》にみられるプラトンの観点を批判しつつ、宇宙が不生であるからこそ不滅であると主張している⁽¹⁵⁾。その際彼は、プラトンが同書において、宇宙が〈γενέσθαι〉であると共に〈ἀϊδιος〉であると説いているとみており、この両者の両立不可能性がプラトンに対する彼の批判の根本前提

となっている。⁽¹⁶⁾《天体論》に即していえば、彼らはまずその第10章において、《ティマイオス》、ことにその<30A>にみられる無秩序な状態の秩序づけというモチーフからする宇宙の生成過程の叙述からみる限り、宇宙は生成したもの、しかも時間的な発端を持つことが必然的に帰結されると主張する。⁽¹⁷⁾ ついで第11～12章において彼は、〈γενητόν〉・〈φθαρτόν〉とその反対概念との関連のきわめて論理的な分析を通して自説を展開していくのである。そして、このようなアリストテレスのプラトン解釈は、プルタルコス (*De anim. procr. in Tim.*, IX-X, esp. X, 1017B), アティコス (apud Euseb., *Praep. Ev.*, XV, 6, 2. 7)等の後代のプラトニスト達にとり入れられ、⁽¹⁸⁾ 時間的意味で宇宙生成の〈ἀρχή〉を説くことにプラトンの真意があったとみなされていく。先の《神の国》第XII卷 13章にみられるアウグスティヌも、このような観点に立脚してプラトンをみているといえよう。しかしこのようなプラトン解釈は、他面、キケロの《神々の本性について》(18, 20)に伝存されているエピクロス派の主張が端的に示すように、⁽¹⁹⁾ 後代におけるプラトン自体に対する批判の有力な論点を提供するものであった。換言すれば、単にアリストテレスによるプラトン解釈ばかりではなく、解釈からする批判ならびにその際の論拠もまた継承されており、またそれが新たな〈ἀρχή〉理解を生み出す契機ともなっていたのである。

ここで先に論を進展さす前に、プラトンとアリストテレスとでは、〈生成〉ということの理解が根本的に異なっていることを指摘しておく必要がある。アリストテレスは、《天体論》第III卷第2章において、自説を裏づけ、ひいてはプラトン批判の論拠として、〈κενόν τι κενχωρισμένον〉の存在の否定という発想を展開している。⁽²⁰⁾ 彼は、そこにおいて、〈生成〉ということがいえるためには物体から切りはなれた空虚の存在を前提しなければならないという。しかしそのようなものがありえない以上、すべてのものに生成があるとはいえないと述べられている。さらにそれにとどまらず、〈ἀπλῶς〉にはいかなるものに関しても〈生成〉ということはいえないとさえ、彼は主張しているのである。これに対しプラトンの場合、たとえば〈生成〉について定義づけがなされている《ソフィステス》(265C)においては、それは、神により以前には存在しなかったものが後になって存在へもたらされることだとされ、さらにあらゆるものは〈θεοῦ γεννήματα〉だといわれ

ているのである⁽²¹⁾ (266B)。このような意味での生成が、アリストテレスのとうてい認めうるものではないことは明らかであろう。またアリストテレスは、《天体論》の同上箇所において、もし宇宙が生成したものであるとするならば、その外にそれを生成せしめ制作するような存在なり原理を想定しなければならないが、そのようなものの存在は考えられないと主張する。そして、それ自体のうちに原理を持つところに、宇宙が芸術作品と根本的に異なる所以がある⁽²²⁾とされ、デミウルゴスといった宇宙の制作者は否定されている。このようにみた場合、アリストテレスにおいては、単に《ティマイオス》的観点にとどまらず、総じて生成なり創造についての通念そのものが否定されているといえよう。

さらに、宇宙が不滅であることの論拠に関しても両者の観点は異なっている。プラトン自身、《ポリティア》(VIII, 546A)にみられる生成したものは本来〈φθορά〉であるという主張からうかがえるように、〈γενετός〉と〈ἀφθαρτος〉とが直接結びつくとは考えておらず、この点については一面においてアリストテレスと軌を一にしている。そしてこれは、後代のプラトニスト、たとえばプロクロスもプラトンの所説として伝え、また彼自身認める⁽²³⁾ところでもある。しかしプラトンは、宇宙が〈γενετός〉だといいながらも、他面それは〈ἀλυστος〉、〈ἀθανασία〉であると《ティマイオス》(32C. cf. 36E)や《ポリティア》(270A)において述べている。そしてこの点は、先のアムプロシウス (semper fore)、ポエティウス (nec habiturum esse defectum)等にみられる彼に関する報告とも内容上一致しているといえる。だがこの場合、彼は宇宙の不滅性の論拠を、むしろそれがデミウルゴスにより生成せしめられたこと自体のうちに求めており⁽²⁴⁾、先のアリストテレスの場合とはきわだった対照をみせている。すなわち《ティマイオス》(41AB)にみられる神の神々に対する宣告からうかがえるたうに、それは形成者である神の意志に求められているのである。そして、これはまたアエティオスといった後代の学説誌家やアウグスティヌスがプラトンの所説として伝えるもの⁽²⁵⁾でもある。

このようにみた場合、宇宙の不滅性に関しては諸家の報告に一応の一致がみられ、またプラトン自身の教説により裏づけられるのに対し、生成の有無、ことにその〈ἀρχή〉の理解に関してはなぜ一致がみられないのであろうか。ここですでに提起した問題に再び立ち帰って検討してみることにしよう。《ティマイオス》に

おいてプラトンは、宇宙が〈γένεσις〉であるといい、その〈28B7〉では漠然とした表現しかとられていないとはいえ、他の箇所ではそれが時間上の〈ἀρχή〉を持つことをさまざまなモチーフにより示唆している。しかしその反面、彼はいわば〈in tempore〉な宇宙の生成理解を否定する発言もまた行なっている。それを端的に示すのは、時間が天体と同時に生成したとする〈ティマイオス〉(38B)にみられる所説である。この観点にしたがえば、宇宙の生成前、それがないところには時間はありえず、生成の〈ἀρχή〉を〈in tempore〉に理解することは不可能かつ妥当性を欠くことになる。しいて時間との関連において宇宙の生成を理解しようとするならば、アウグスティヌスのひそみにならって〈cum tempore〉に宇宙は生成したというほかない⁽²⁷⁾。さらに、宇宙の永遠このかた未来永劫にわたる存続を主張しようとするならば、《ティマイオス》の当該箇所は大きな障害とならざるをえない。そこからは〈a parte post〉という限定の下に、宇宙の不滅性をいうしかない。しかも〈ab aeterno〉からする宇宙の生成を否定するこのような観点に対しては、また、不変なる神に意志の変化や無為を帰することになるのではないか、というアウグスティヌスが論駁してやまない聖書に対するのと同様の異論が提起されうるのである⁽²⁸⁾。《ティマイオス》それ自体に即して考えてみても、プラトンは、以上のように、同一テクスの中で、宇宙の生成、ことにその〈ἀρχή〉に関し、一方ではそれが時間的であることを示唆しながらも、他面それを否定する発言を行なっていることになり、そこには矛盾がみられる。宇宙の継続期間についても、生成の〈ἀρχή〉をいずれにとるかににより、異なった観点が生ずることになる。プラトンの宇宙生成についての所説に関し、後代の諸報告が一致していない理由の一つは、《ティマイオス》そのものにおけるこのような矛盾する主張の共存という事実を求めることができ、またこの矛盾をいかに調定するか、そこに解釈上の観点の相違が反映されてくるのである。

(4)

《ティマイオス》、ことにそこにみられる〈ἀρχή〉解釈の系譜上、それを時間的に解そうとする先のアティコス、プルタルコス等の観点はむしろ例外的だといってよく、そこで大勢を占めてくるのはアウグスティヌスにおいて組上はのぼっているような解釈である。そしてこの場合、〈ἀρχή〉を非時間的にみる人々は、共

通して次のような意図なり発想なり観点に立脚しているように思われる。まず第一に、これらの人々はプラトンとアリストテレスの折衷をはかろうとしている⁽²⁹⁾。その場合彼らは、生成と永遠とが両立しがたいというアリストテレス的観点を承認しつつ、⁽³⁰⁾〈ティマイオス〉自体にみられる矛盾を調定し、そのうえで、これとアリストテレスとを折衷しようとしているとみることができる。そしてこの二重の折衷の過程を通して、彼らは宇宙の〈ab aeterno〉からする生成、ひいてはその永遠性なり永続性を裏づけ、主張しようとしているように考えられるのである。第二に、これらの人々には、テキストに対し、それを字義通りに解するよりも、むしろそこに展開されている生成の叙述を〈ἐξ ὑποθέσεως〉からなされたものだとする傾向がみうけられる⁽³¹⁾。また生成の〈ἀρχή〉の非時間的解釈は、いわゆる新プラトン主義に属する人々にみられるものであるが、これは、次の第三の特色と関連し、このような解釈の最も根底をなすものである。すなわち、これらの人々は、あるものがあるものたらしめる原因なり原理は、そのもの自体の中に求めるべきではなく、それ以外の、しかもそれよりも高次の實在に求めるべきだという新プラトン主義的発想に依拠し、それを前提として〈ティマイオス〉をいわば再解釈しているとみることができる⁽³²⁾。このことを端的に例証するのが、もし宇宙が〈κατὰ χρόνον γενητός〉であるとするならば、時間はいわば〈causa sui〉となるという、まさに〈ティマイオス〉(36B)を論拠とするプロクロスによるアティコス、プルタルコス批判であろう。したがって、これらの人々は、宇宙が時間上の、もしくは時間的〈ἀρχή〉を持つことを否定しているのであって、宇宙がいかなる〈ἀρχή〉を持たず、〈causa sui〉だと主張しているわけではない。換言すれば、宇宙生成の〈ἀρχή〉に対し時間的意味とは異なった別の解釈がなされたのであり、その成果がアウグスティヌスにおいて〈creationis initium〉、〈substitutionis initium〉と呼ばれ、批判の対象とされている発想なのである。そしてその具体的意味は、〈Et mundus sensibilis opus dei, origo igitur ejus causativa, non temporalia〉というカルキディウスの言葉にたくみに要約されているといえる⁽³³⁾。次にプロクロスの〈ティマイオス註解〉を手がかりに、〈origo causativa〉のより具体的検討をこころみることしよう⁽³⁴⁾。

プロクロスは、〈ティマイオス〉(27C)—〈η γέγονεν η και ἀγενές ἐστιν〉—に

対する註解において、このような問題提起をなすにあたりプラトンの真意がどこにあったかをめぐる先人達のさまざまな解釈とその異同を、そこにみられる〈η〉にどのような気音を付すべきかという問題に対応させつつ分類し、(ἦ…ἦ; ἦ…ἦ; ἦ…ἦ)に要約⁽³⁵⁾している。まず、プラトンの真意が、宇宙が〈ἀεὶ ὧν καὶ γενητός〉であることを説くことにあったとするアルピノスの見解が紹介される。その際アルピノスは、プロクロスにしたがえば、次のような論拠にもとづいていることになる。すなわち、宇宙は不等かつ多数の部分からなっているからして、その〈σὺνθεσις〉にあたって、宇宙はそれ自体とは別の、しかも〈ὑπόστασις〉に関してそれよりも〈πρᾶσβυτέρα〉な〈αἰτία〉を必然的に持っていなければならない。プラトンは、この意味で宇宙を〈γενητός〉だと述べているのであり、したがってこの〈γενητός〉、ひいては〈28B7〉にみられる〈ἀρχή〉を〈κατὰ χρόνον〉に理解することは妥当ではない。換言すればアルピノスは、〈ἀρχή〉を、宇宙生成の原理・原因を示唆するものとみていることになる。⁽³⁶⁾これと軌を一にする観点は、プロティノスにもみられるものであり、⁽³⁷⁾プロクロスも基本的にはこの観点を継承しているが、その際彼に直接影響を与えたのは、彼自身認め、またフィロポノスの証言からもうかがえるように、ポルフェリオス、ことに今は散逸したその《ティマイオス註解》第II巻にみられる〈ἀναρχος γένεσις〉の所説であったと⁽³⁸⁾考えられる。

彼は、さらに《ティマイオス》(28BC)に対する註解において、ポルフェリオス等先人の見解を継承敷衍しつつ、自己の〈ἀρχή〉に関する所説を展開しているが、その際彼の論点の核心は、やはり宇宙が自己原因ではないことを論拠に、〈γενητός〉と〈ἀγένητος〉とを決して相互に排除するものではないとみていることに⁽³⁹⁾求められる。彼によれば、宇宙はたしかに〈γενητός〉であり、したがってなんらかの〈ἀρχή〉に発するものではある。しかしその場合、〈ἀρχή〉とは、〈ἀρχή χρονική〉を意味するのではなく、プラトンが述べているように〈τελική〉に解さなければならない⁽⁴⁰⁾と彼は主張する。〈ἀρχή〉のこのような解釈は、彼の《ティマイオス註解》の隨所にみられるものであるが、それを例証するプラトンの発言として彼の念頭におかれているのは、明らかに《ティマイオス》(29E)にみられるデミウルゴスによる宇宙生成の根拠を示す〈ἀγαθὸς ἦν〉⁽⁴¹⁾である。このように宇宙の被造性と永遠性—⁽⁴²⁾彼の場合厳密にいえば後にみるように永続性—とのパラドックスを調定し、ひい

ではプラトンの観点とアリストレスの点観を折衷するにあたり、〈ἀρχή〉を *causativa* にみようとするのは、彼の先人達にすでにみられるいわば常套論法だといってよいが、この一連の系譜の中で、《ティマイオス》の同上箇所に着目し、〈ἀρχή〉を目的因と明白に規定している点において彼は独自の地位を占めているといえる。しかし《ティマイオス》のこの箇所は、先にふれたアウグスティヌスが批判してやまない、宇宙の永遠性を説き、創造者と被造物とを等しく永遠とみなそうとする観点が形成されるに際し、その有力な論拠となる契機を内包しているのである。その典型的な例として、たとえばプロティノスの次のような主張をあげることができる。

彼は《ティマイオス》(29E)、ことにそこにみられる〈ἦν〉に着目しつつ、同書において宇宙生成の叙述が aorist ではなく imperfect でなされていることを論拠に、生成の〈ἀρχή〉を時間的に解すべきではないこと、および宇宙が無始・無終であることを主張する⁽⁴³⁾。そして《ティマイオス》のこのような解釈から、宇宙生成の原因、もしくは〈παράδειγμα〉の永遠性をそのまま宇宙に置換し、宇宙それ自体が原因と等しく永遠だとする観点が生み出されることにもなる⁽⁴⁴⁾。アウグスティヌスが、先にふれた《神の国》(X, 31)において、靈魂と神とを等しく永遠であるとするプラトンの徒を批判するにあたって、彼らの論拠として提示しているものが、まさにこのような解釈に相当する。すなわちアウグスティヌスにしたがえば、この種のプラトンの徒は、永遠このかた常にちりを踏んでいる足と、その結果生ずる足跡との間に先後関係をいうことができず、また足が踏んでいる限り足跡があるのと同様に、創造者が常に存在している以上、それにより創造されたものも常に存在する、とは主張していたことになるのである⁽⁴⁵⁾。

ここで、先にみたポエティウスのプラトンの所説の曲解者に対する批判を想起してみる必要がある。ポエティウスは、プラトンの宇宙生成の所説についての彼自身の学説的報告からもうかがえるように、宇宙の生成、ひいてはその〈initium〉を時間的ではなく〈causativa〉にみているといつてよく、この点に関する限り彼はアウグスティヌスにおいて批判されている新プラトン主義的観点につらなっているように考えられる。しかし他面彼は、原因とそこから生ずるものとを等しく永遠とみることに對しては批判しており、この点においてはアウグスティ

ナスと同一の見解に立脚しているように思われる。このようにみた場合、彼が批判の対象としている〈quidem〉が誰をさすのかという問題に関連して（次章参照）、〈ἀρχή〉の理解に関しては解釈上軌を一にするプラトニスト達の間にも、宇宙の継続期間に関しては見解の異同が存在するのではないかという問題が生じてくる。生成の〈ἀρχή〉を非時間的に解する限り、当然そこから宇宙の〈ab aeterno〉からする生成が帰結されてくるはずである。そしてこの場合、宇宙が無始・無終だということを即それが永遠だと理解することの是非の問題が、生成の〈ἀρχή〉理解に関連して提起されてくることを、プラトンの曲解者に対する彼の批判は示唆しているといつてよい。事実、以下にみる永遠と時間、永遠と永続の区別は、以上検討を試みた生成の〈ἀρχή〉をいかに理解すべきよという問題が契機となって展開されてきたとみることができるのである。

(5)

トマスは、神における〈aeternitas〉の問題を論及した《神学大全》(I, q.10, a.5)の主論において、永遠と時とを区別する場合、前者が〈principium〉と〈fimis〉を持たないのに反し後者がそれらを持つことに〈ratio〉を求めるのでは不十分であり、それは〈differentia per accidens〉を示しているにすぎないと主張している。そして、ボエティウスの《哲学のなぐさめ》(V, pr.6, 9~10)にみられる〈Aeternitas igitur est interminabilis vitae tota simul et perfecta possessio〉という永遠の定義をひきあいに出し、これに対する六つの異論を論駁しつづ⁽⁴⁶⁾、これこそが永遠と時との〈differentia per se〉を示すものだと述べている。ボエティウスのこの定義は、直接には、摂理と自由意志とのアンティノミーをいかに調定すべきかという古来の問題に対する解決策に関連して出されてきたものである。すなわち認識とは、認識対象の本性に即してではなく、むしろ認識主体の本性に即して〈secundum cognoscentim naturam〉なされるのだとする認識論がそこでは展開されており、神のなす認識と人間のそれとが異なる所以が、両者の本質上の相違に求められている。ボエティウスの同書同巻においては、神とその被造物とは、〈simplicitas〉—〈multiplicitas〉等さまざまなモチーフにより対比されているが、それらは究極的には永遠と時間との本質的相違に収斂されている。そしてこれと関連して、時間のなす〈perpetuitas〉と、神の〈aeternitas〉とが区別され、またそれを論拠とし

てプラトンの曲解者に対する批判がなされてくる。しかもその際彼は、〈神は永遠に存在するが、宇宙は永続する〉という永遠と永続との区別をプラトン自体の所説に帰しているのである(V, pr. 6, 57sq.)⁽⁴⁹⁾。

ところで、ここで目されているプラトンの曲解者とは、具体的には一体誰をさしているのだろうか。この問題は、彼にみられる永遠の定義、ならびにそれと永続との区別が彼の独創によるものなのか、あるいは他のなんらかの典拠にもとづくものなのかということとも関連してくる。彼は、すでに前章において示唆したように、プラトンにしたがって宇宙が無始だという場合、それを〈causa sui〉だと考えているわけではない。彼によれば、神は万物の創始者であり、宇宙は原因としての神による〈condita res〉⁽⁵⁰⁾である。また彼は、神が〈condita res〉に対し〈antiquor〉であるのはその精神の〈simplicitas〉という特性によるのであり、〈temporis quantitas〉によってではないと主張している⁽⁵¹⁾。このようにみた場合、彼の永遠と永続との区別が、原因とそこからする結果とを存在論的に階層化する、新プラトン主義的観点に依拠しているであろうことは明らかだといってよい。したがって宇宙生成の〈initium〉についても、彼は先のプロクロス、カルキディウス等と同一の系譜に立脚しているとみることができる。彼は、アリストテレスに〈宇宙が無限の時間にわたって存続する〉という教説を帰しており(V, pr. 6, 20sq.)、宇宙の継続期間に関してはプラトンとアリストテレスとの間に見解の根本的相違があるとは考えていない。彼は、これら一群のプラトニスト達と同様に、〈initium〉を〈causativa〉に理解することにより、プラトンとアリストテレスとの折衷をはかっているとみることができる。しかし、ここで生成の理解に関しては共通の立場をとる人々にあっても、永遠と永続とを区別するかいなかについては、かならずしも見解が一致してはいないことに留意する必要がある。たとえばカルキディウスは、先に引用したその《ティマイオス註解》の同箇所において(本稿 119 頁)、宇宙の〈origo〉を〈causativa〉に解したうえで、さらに宇宙に永遠性を附与している(…a deo tamen factus atque institutus, aeternitas)。カルキディウスにあっては、かならずしも〈aeternitas〉と〈perpetuitas〉とが区別されているとはいいがたく、彼は、またアリストテレスの所説として、〈Idem sine genitura et sine interitu dicit mundum esse divina providentia perpetuitatipropagatum〉(c. CCLXXXIII, 286,

68. *W.*), と述べており, ここでは〈perpetuitas〉が用いられているのである。

このようにみた場合, 〈aeternitas〉と〈perpetuitas〉の区別ならびに適用に関し, カルキディウスとポエティウスは著しい対照をなしているといえる。13世紀, シャルトル学派の手によるポエティウスの前掲書に対する註解において, アリストテレスの形相因・質料因の発想を援用することにより, この点をめぐる両者間の見解の折衷が試みられているという, 興味ある事実さえ見出すことができるのである。⁽⁵²⁾そしてポエティウスでいわれている〈quidam〉とは, 一見このカルキディウスが念頭におかれているように考えられてくる。しかしポエティウスの批判の眼目は, 単に〈aeternitas〉と〈perpetuitas〉とを区別しないということにあるのではなく, むしろ創造者(原因)と被造物(結果)とを同一次元におき, 両者の本質的差異を解消してしまうことにあるといつてよい。だがカルキディウスは, 生成の〈initium〉を〈cansativa〉に解しており, この点に関する限りポエティウスと共通の観点に立脚している。このように考えた場合, ポエティウスの批判は, 生成の〈initium〉を〈cansativa〉に理解しないものに向けられているように思われてくる。換言すれば, ポエティウスの真意は, 生成の〈ἀρχή〉を時間的に解するアリストテレスの《ティマイオス》解釈を, 《ティマイオス》それ自体の意味するところとみなし, それを逆手にとってアリストテレス自身の見解を宇宙の永遠性を説くものとして批判する人をさらに再批判することにあつたということもできる。そしてこの点に関し詳細な考証を試みているクールセルによれば, 〈quidam〉とは,⁽⁵³⁾具体的には Zacharias de Mitylene が目されていることになる。Zacharias は, プロクロスの後継者ヘルミアスの子アムモニオスが, 486年アレクサンドリアにおいてなしたアリストテレスの《自然学》に関する講筵に列し, 後に《'Αμμώνιος. ὅτι οὐ συναῖδιος τῷ Θεῷ ὁ κόσμος, ἀλλὰ δημιουργήμα αὐτοῦ τυγχάνει》を著わし, アムモニオスの講義の内容を宇宙の永遠性を説く異端の教説として批判した。しかしクールセルは, この批判が護教的意図からする曲解であり, 当を得ていないことを, 散逸したアムモニオスの《アリストテレス自然学註解》の内容をシンプリキオスのアリストテレスの同書に対する註解から再構成しつつ裏づけている。すなわちアムモニオスは, 単純に宇宙の永遠性を主張しているわけではなく, そこにおいては〈ἀἰδιος〉と〈αἰώνιος〉とが区別されていることをクールセ

ルは指摘しているのである。⁽⁵⁴⁾

永遠を時間ならびにそのなす永続から区別する発想は、いわゆる新プラトン主義の思想家達に共通にみられるものだといってよい。彼らにあっては、存在の階層化に対応させつつ、たとえば摂理と運命とを厳密に分けようとする傾向がみられるが、永遠と永続の区別も例外ではない。⁽⁵⁵⁾そして、ポエティウスのこの点をめぐる見解も、基本的には当代の新プラトン主義的観点を継承するものといえる。まず永遠に関しては、その典型として、《永遠と時間》と題されているプロティノスの《エンネアデス》第III巻第7篇、ことにその第3章および第5章にみられるその定義があげられる。すなわちそこでは、永遠が、結論的に〈γίνεται τοίνυν ἢ περὶ τὸ ὄν ἐν τῷ εἶναι ζωῇ ὁμοῦ πᾶσα καὶ πληρῆς ἀδιάστατος πανταχῆ τοῦτο, ὃ δὴ ζητοῦμεν αἰών〉(III7, 3, 36-8), 〈καὶ εἰ τις οὕτω τὸν αἰῶνα λέγοι ζωῆν ἄπειρον ἤδη τῷ πᾶσαν εἶναι καὶ μηδὲν ἀναλίσκεν αὐτῆς τῷ μὴ παρεληλυθέναι μηδ' αὖ μέλλειν〉(III, 75, 25-28)と規定されている。このような永遠観、ならびにそこからするこれと絶えず経歴する時間との対比は、先のポエティウスにとどまらず、アウグスティヌス、プロクロス、さらには宇宙の永遠性を論争が熾烈をきわめた13世紀の思想家にみられる永遠観と対応しており、これらの人々が直接・間接彼の影響下にあったことが推測される。⁽⁵⁶⁾しかしポエティウスにみられる〈perpetuitas〉(sempiternitas—本稿註[49]参照—)と〈aeternitas〉との区別、ならびにそれがなされてくる問題意識に即して考えた場合、ポエティウスの観点と著しい対応関係がみられるのはプロクロスである。⁽⁵⁷⁾

プロクロスは、永遠と時間の問題を論及している《神学綱要》(Prop. 52~55. esp. 55), ならびに《ティマイオス》(27D)にみられる〈ἀεὶ ὄν〉に対する註解において (In Tim. 73CD.I, 238, 15sq. esp. 239, 2sq. D.), 〈τὸ ἀεὶ〉, ひいては〈ἀϊδιότης〉を、(1)〈τὸ ἀεὶ τὸ αἰώνιον〉と(2)〈τὸ ἀεὶ τὸ χρονικόν〉(αἰδιότης κατὰ χρόνον) とに区別する。そして、両者が根本的に異なることを次のように説明している。すなわち前者は、〈τὸ ἀθρώως πᾶν ὄν〉 (In tim. 239 3srg. D.) を意味し、〈κατὰ τὴν ὑπόστασιν〉に〈ἀμετάβληστον καὶ ἀνεξάλλακτον〉なるもの、換言すれば〈τὰ νοητά〉についてのみにいう。これに対し〈τὸ ἀεὶ τὸ χρονικόν〉とは、〈τὸ δὲ τῇ ὅλῃ συνεχείᾳ τοῦ χρόνου συνεντεινόμενον καὶ ἄπειρον〉

を意味するといひ、彼はそれを絶えず生成をくり返しているこの宇宙に適用して
 いる。⁽⁵⁹⁾したがって彼は、フィロポノスが批判するように、宇宙とその生成の原因と
 を〈συναϊδιος〉⁽⁶⁰⁾に考えているわけではなく、後者の意味において宇宙が〈ἀπεριόρα
 χρονική〉に存続すると主張しているにすぎない。そして彼は、この所説を、ポエ
 ティウスの場合と同様に、プラトンそれ自身に帰している。そしてこのような観
 点に立ったうえで、程度の低いアリストテレス主義者にまどわされて宇宙の永続
 性を否定する人々に対する、先の批判がだされてくるのである。プロクロスこの
 の批判が、ポエティウスのプラトン曲解者に対する批判と軌を一にするものであ
 ることは明らかであろう。両者共、《ティマイオス》にみられる生成の〈ἀρχή〉を
 〈causativa〉に解することにより、プラトンとアリストテレスの宇宙の継続期間
 に関する所説の折衷をはかっているといえるのである。⁽⁶²⁾

(6)

以上の検討からうかがえるように、永遠と時間との区別は、生成の原因とそこ
 から発するものとの存在論的区別に対応し、むしろ後者の観点を主張し根拠づけ
 ようとするところに両者が区別される所以が求められるように考えられる。そし
 て、自己同一性・不変性・包括性・現在性といった永遠の諸規定は、〈τὸ εἶναι〉、
 〈τὸ ὄν〉、〈εἰς ὄν〉という宇宙生成の原因なり創造者の本質に究極的に収斂し、
 またそれを反映するものでもある。⁽⁶³⁾このような宇宙生成の原因なり創造者のいわ
 ば存在性への着目は、プロティノス、プロクロス、ポエティウス等の新プラトン
 主義的観点に共通してみられるものであり、またプラトンの聖書依拠説を展開す
 るに際し、《出エジプト記》(3:14)を最も有力な論拠とみなす先のアウグスティ
 ヌスもその例外ではない⁽⁶¹⁾(本稿第1章)。この場合、前者の系譜においては、〈ἀρ
 χή〉の〈causativa〉な理解の下に、〈ab aeterno〉な宇宙の生成、ひいてはその永続
 性が主張され、裏づけられていく。そしてこの観点は、他面、宇宙生成に際して
 質料の先在、ならびにそれと創造者との二元論が否定され、ヒエロクレスにみら
 れるような、神の意志による無からの創造という一元論が展開されてくる契機と
 もなっているといえる。⁽⁶⁵⁾これに対しアウグスティヌスの場合、〈in tempore〉な創
 造の否定という点に関しては先の系譜と共通の観点に立脚し、また永遠と時間と
 の区別に際して前者にみられる発想が援用されながらも、⁽⁶⁶⁾究極的にはそれが逆手

にとられ、前者の主張が否定され、〈cum tempore〉な創造が主張されているのである。ここでわれわれは、《ティマイオス》ことにその〈28B7〉が解釈上内包する論点が、古代末期において、キリスト教と当代の新プラトン主義との根本的相違が露呈されてくる一導火線となっていることを知るのである。

註

— [1] — (1)拙著『初期キリスト教とギリシア哲学』第1章「ギリシア哲学へブル起源説」参照。(2)*In Tim.*, 86E, 286, 1 9sq. D (3)pr. 6, 31 (4)*Philop.*, *De aeternit. mundi contra Procl.*, VI 27, 211, 12. VI 28, 229, 10R., および前掲拙著附論「“ティマイオス”(28B7)解釈史ノート」。(5)cf. Pépin, J., *Théologie cosmique et théologie chrétienne*, P. 41. 96. (6)cf. *De civ. Dei*, XII, 16 (ne aliquam (sc. creaturam) creatori coaeternam dicamus, quod fides ratione sana condemnant.), またフィロポノスのプロクロス批判の核心も、後者の観点からすれば神と宇宙とが〈συναΐδιος〉になるとみることにあった。cf. *Philop. op. cit.*, I 4, 14, 10sq. R., および前掲拙著265頁註(4)。(7)前掲拙著附論参照。(8)cf. Bréhier, E., *Histoire de la Philosophie*, t. 1, fasc. 2, P. 486; Gilson-Böhner, *Christliche Philosophie*, S. 405. (9)cf. Behler, E., *Die Ewigkeit d. Welt*, S. 6. 20 sqq. — [2] — (10)cf. *c. Acad.*, III, 10, 23. (11)cf. *Tert.*, *Apol.* 47, 8; *Lact.*, *Div. Inst.*, VIII. 1, 6-10 B., Pépin, *op. cit.* p. 81, n. 1 (12) *C.S.E.L.*, XXXII, 1 (p. 4, 5~8 S. apud Pépin, *op. cit.* P. 12)。なおこの箇所が、フィロンの《*De aet. mundi*》(III, 7~IV, 13)に対応することについては、cf. Pépin, *op. cit.*, p. 252. (13) *Consol. phil.*, V, pr. 9, 20. (14) *Consol. phil.*, V, pr. 6, 32. — [3] — (15) *De caelo*, I 12, 281A28~25〈ἀφθαρτος〉; I 12, 281B25~32〈αἰδιος〉 I 12, 282 A25~26; なお、アリストテレスの宇宙の永遠性主張の論拠については、Solmsen, F., *Aristotles System of the Physical World*, pp. 269 sqq; Behler, *op. cit.*, SS. 37sq; Pépin, *op. cit.*, p. 474; また、いわゆる〈*De philosophia*〉にみられるこの点に関する彼の見解については、Behler, *op. cit.*, S. 38, Pépin, *op. cit.*, pp. 257sq., および *Idées Grecques sur L'homme et sur Dieu*, p. 328 sq. (16) *De caelo*, I 10,

279B 17~18. (17) *De caelo*, I 10, 279B 31~280A 11. 280A 31~32, cf. *Pys.*, IV 11, 219B 1 sq., VIII 1, 251B 17sq. (18) cf. Procl., *op. cit.*, I, 276, 30sq., 283, 28sq.D.; Philop., *op. cit.*, VI27, 211, 12sq. (19) <…qui non modo natum mundum introduxerit sed etiam manu paene factum, is eum dixerit fore sempiternum…, quicquam quod ortum sit putet aeternum esse posse? Quae enim coagmentatio non dissolubilis? aut quid est cui principium aliquod sit, nihil sit extremum? > (20) *De caelo*, III 2, 301B~302A, ct. *Phys.*, IV 8. (21) ここで、プラトンにおいても (*Tim.* 28 -γεννητᾶ-, 41D-γεννήσας-)、またプラタルコス (*De anim. procr. in Tim.*, IX, 1016CE, X, 1017B)、アティコス (apud *Praep. Ev.* XV, 6, 7)、プロクロス (*De mal. subsist.* X, 35, 12=217B.—θεοῦ γεννήματα-) 等の後代のプラトニストにおいても、〈γεννητὸς〉と〈γενήτος〉とがかならずしも厳密に区別されていないことは、両者の区別が三位一体の理解に関し論争の核心となる後のキリスト教神学との対比において注目を要する。(22) *Met.*, N3, 1070 A; *E. N.*, VI 4, 1140A. (23) *In Tim.*, I, 287, 12sq. 293, 17. sq (24) cf. Pépin, *Théologie cosmique*, p. 26.44. (25) Aetios, *Placit.* II 4, 12= *D. G.*, 330A 15sq. *D.*, Aug. *De civ. Dei*, X, 31 (26) *Tim* 30A (cf. *Polit.*, 273B). 32C. 41B (27) *Conf.*, XI, II, 13. 15, XI; 11, 13. *De civ. Dei*, XI, 6, および Thomas, *S. T.*, I^a, q. 46, a. 3 ad 1—(simul cum tempore)— (28) *Conf.*, XI, 10, 12. 30 ; cf. *De civ. Dei*, XI, 4. — [4] — (29) cf. Pépin, *op. cit.*, p. 89; Courcelle P., *Les Lettres Grecques en Occident*, pp. 295 sq., および拙稿「最近のポルフュリオス研究の動向」(『中世思想研究』14号所収)。(30) cf. Procl., *In Tim.*, I, 340, 25.D. にみられるアルピノスに関する報告、および、Pépin. *op. cit.*, p. 94, 前掲拙著 256. 265~6頁。(31) cf. Theiler W., *Porphyrios u. Augustin* (in *Forschungen zum Neuplatonismus*, S. 172), Beierwaltes, W., *Proclus*, SS. 136 sq. ; Parma, C., *Pronoia u. Providenz*, SS. 19sq., Plotinos, *Enn.*, III 7, 6, 53~54; III 2, 1, 22~29, 本稿註(37)・(50) および前掲拙書第6章。(32) *In Tim.*, I, 276, 31 sq. *D.* (プラタルコス) ; I, 283, 27sq. *D.* (アティコス) (33) cf. Philop., *op. cit.*, VI, 145, 6sq. *R.* (カルウイシオス・タウロス, ポルフュリオス, プロクロスに関して) (34) *In Tim.*, c. XXIII, 74, 18W.

③5 *In Tim.*, 67C, I, 218, 28~219, 31 D.. ③6 cf. *in Tim.*, 219, 5sq. esp. 8~10.
 ③7 cf. II 9, 7, 1~2; III 2, 1; III 2, 1, 20~23; III 7, 6, 54sq. なお本稿註一③1— ③8 *In Tim.*, I, 277, 11~15. cf. I, 219, 20~31 D. ; *Philop. op. cit.*, VI 8, 145, 3 ; 148, 9~10 ; 149, 13~16 ; VI 10, 154, 5~6 ; VI 27, 224, 18 sq. R. ③9 *Philop., op. cit.*, VI 8, 148, 5~7. R. ④0 *In Tim.*, I, 285, 21 sq. D. ④1 *In Tim.*, I, 281, 29 (ad28B), I, 293, 17(ad27C), I, 360, 16 D. (ad 29E) ④2 *In Tim.*, I, 285, 29~286, 19 D. ④3 II 9, 3, 12~14 ; cf. III 7, 6, 53~54. ④4 *Philop. op. cit.*, VI 8, 147, 5~9 R. (カルウィシオス・タウロスの太陽と月光の関係からする宇宙の永遠性の主張), *Sallust., De diis et mundo*, VII, 2 (太陽と光, 影と肉体の共存関係) cf. *Enn.*, III 2, 1, 22~26 ④5これがポルフュリオス, ことにその《*De regressu animae*》を念頭においたものであることは, プロクロス (*In Tim.*, I, 382, 19~20 D.), フィロポノス (*op. cit.*, XV 13, 547, 8 R.) から例証されうる。なお, cf. Pépin, p. 93 ; Courcelle, *op. cit.*, p.174, n3. — [5] — ④6 cf. *S. T.* I, q.10, a.1 ④7この定義の中世に対する影響については, cf. Behler, *op. cit.*, SS.10 sq. esp. Anm.3 ; Beierwaltes, *Zeit u. Ewigkeit*, SS. 199 sq. ④8拙稿「摂理・運命・自由意志—カルキディウスとポエティウス—」(『文経論叢』第VII巻哲学篇第VII号所収) 参照。 ④9ポエティウスは, 他の著作, たとえば《命題論注解》(*In Isag.*, ed.sec. IV, 6=C.S.E.L. XLVIII, 257, 6B.—cf. Courcelle., *La Consolation de philosophie dans la Tradition littéraire*, p. 226 ; Beierwaltes *op. cit.* S.158—) においては両者を区別してはいない。しかし《*De Trinitate*》(IV)においては両者の区別(ただしここでは *perpetuitas* ではなく, *sempiternitas* が用いられている)がみられる。そこでは, アリストテレスの《カテゴリアエ》第4章(1B)にみられる10の *praedicamenta* が, どのような主語に述語づけられるかによりその意味がかわってくるのが説かれ, <quando>を神について適用する場合と人間に適用する場合との比較を通して, <currentes tempus>のなす<sempiternitas>と神の<aeternitas>とが区別されている (II. 59sq. esp. 72sq.=Stewart-Rand)。そして究極的には, <aeternitas>は神の存在そのものを示すとされている (II. 99sq.)。 ⑤0 IV, pr. 6, 22 sq. cf. III, met. 9 にみられる《ティマイオス》の要約, および III, pr. 11, 98 (creare) ⑤1 IV, pr. 6, 38~40. cf. IV, pr. 6, 179~80にみられる, 神と神に発す

るものとの関係を、〈id quod est〉と〈id quod gignitur〉との関係になぞらえる発想、および、Aug., *Conf.*, XI, 13, 16, 本稿註③)。②〈Eterna vero dicuntur ante tempus et cum tempore et post tempora,……sicut Deus pater τὰγαθόν, et noys id est mens, et mateira illa unde factus est mundus……Mundus autem dicitur eternus secundum philosophos quantum ad materiam, perpetuus vero quantum ad formam.〉(*Glosse sur Consolatio*, Paris, *Bibl. Nat.* 15104, fol 193, apud Marie Dominique Chenu, *La théologie au douzième siècle in Platonismus in d. Philosophie d. Mittelalters* S. 276)。また宇宙の永遠性を主張する場合、形相因・質料因のいずれにその論拠を求めるかにより、二つの系譜が存在したことに関しては、cf. Behler, *op. cit.*, S. 48. 67. また、ポエティウスとプロクロスとの親近性、およびこれら両者とカルキディウスの対照に関しては、cf. 前掲拙稿「摂理・運命・自由意志」③ cf. Courcelle, *La Consolation de Philosophie*, pp. 227 sqq., *Les Lettres Grecques*, pp. 295 sqq., Pèpin, *op. cit.*, p. 283, n. 4, 本稿註④。④ Simpl., *In Arist. Phys.*, C.A.G., X, 1154~1155, esp. 1155, 13 D. (ad *Phys.* 251B17) cf. Courcelle, *La Consolation de philosophie*, p. 228 ⑤存在の階層化の問題については、cf. 前掲拙著第4章、ならびに拙稿「摂理・運命・自由意志」⑥永遠の規定をめぐるポエティウスとプロティノスとの対応については、cf. Bierwaltes, *Zeit u. Ewigkeit*, SS. 198 sqq. (n. ad II, 5, 25~28), また Aug. *De civ. Dei*, XI, 6; *Conf.*, XI, 11, 13, 16; XI, 14, 17, Guittou J., *Le temps et éternité chez Plotin et Saint Augustin*, chap. VI, esp. pp. 200 sqq. ⑦プロティノスにおいても、プロクロスにみられるような〈αἰών〉と〈ἀϊδιότης〉の区別がないわけではない。しかしプロティノスにあたっては、両者共英知界に対し適用されており、両者の区別は、英知界の〈ἀεὶ〉であることを〈τὸ ὑποκείμενον〉の観点からみるか、〈τὸ ὑποκείμενον〉の〈κατάστασις〉としてとらえるかというアスペクトの差違にもとづく。III 7, 3, 2; III 7, 5, 15 sqq., cf. III 7, 3, 2 3sq. ⑧ cf. *Stoich. Theol.*, prop. 55 (pp. 52, 30~53, 5 Dodds) ⑨ *In Tim.*, I, 239, 1 sqq. D. cf. *In Tim.*, I, 291, 7~9 D. ⑩ cf. 本稿註(6). ⑪ *In Tim.*, I, 278, 1; 286, 20 D. ⑫ cf. Courcelle, *La Consolation de Philosophie*, p. 225. なお彼はアムモニオスを介してポエティウスはプロクロスの影響を受けていると考えている。cf. p. 227~228, Pé-

pin, *op. cit.* p. 89, 本稿註53, および前掲拙稿。 —〔6〕— 63 cf. *Enn.*, III 7, 3, 34; *Consol. Phil.*, IV, pr. 6, 77—本稿註51—, *Procl.*, *In Tim.*, I, 291, 7sq. *D. Conf.* XI, 13, 16; XI, 14, 17. なお神を〈εἶς ὄν〉と規定し, そこから永遠の問題を論及した者としては, プルタルコスがいる。 cf. *de E ap. Delphi*, esp.c.19, 392E。またこのような発想の起源がEudoros, Ammonios いずれに遡及されるべきかという問題に関しては, cf. Armstrong, A. H., *Eternity, Life and Movement in Néoplatonisme* pp. 68sq. esp. 70 sq. 64 cf. 山田晶氏「在りて在る者—アウグスティヌスとトマス の Exod. 3, 14 解釈—」(『京大文学部紀要』第 13), および「在りて在る者—アウグスティヌスの Exod. 3, 14 解釈—」(『哲学研究』524号) 65 Hierocles, *De provid.* (apud Phot. *Bibl. Cod.* 172A24, 461B7 sq.) cf. Beierwaltes, *Proclus*, S. 137, Anm. 37; 145. Anm. 86; Courcelle, *La Consolation de Philosophie*, pp. 223 sq. 66 cf. 本稿註56